

# 令和5年度学校経営計画に対する中間評価報告書

石川県立七尾高等学校

1 豊かな人間性と国際性の育成					
重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<p>・学校行事、生徒会活動や部活動等あらゆる活動を通して、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦し、課題解決ができる力を育成する。</p>	<p>・生徒一人ひとりが一日一善の精神で、他者に対して小さなボランティアを行う。</p> <p>・各部ボランティア活動「校内」「地域貢献」（随時）</p>	<p>【成果指標】（生徒）</p> <p>一日一善運動や校内・地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを「実感できる」。</p>	<p>一日一善運動や校内・地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを「実感できる」・「やや実感できる」と答える生徒の割合の合計が</p> <p>A 85%以上 B 75%以上 C 65%以上 D 65%未満</p>	<p>【7月実施学校評価アンケート】（生徒）</p> <p>71.8% C</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】ボランティア活動に対して、主体的に取り組んでいるが、達成度に対する振り返りが不十分なため「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを実感できるまでには至っていない。</p> <p>【今後の対応】後期も引き続きボランティア活動を実施していくが、活動後に達成度の振り返りをする中で、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを実感できるようにする。</p>
	<p>・令和5年度地域の特色を活かしたふるさと教育推進事業（1、2年）</p>	<p>【満足度指標】（生徒）</p> <p>ふるさとの良さを知り、ふるさとに対する誇りと愛着を実感できている。</p>	<p>4月に比べると、ふるさとの文化、産業、地域で活躍する人達を知り、ふるさとに誇りと愛着を「実感できた」・「やや実感できた」と答える生徒の割合の合計が</p> <p>A 80%以上 B 75%以上 C 70%以上 D 70%未満</p>	<p>【7月実施学校評価アンケート】（生徒）</p> <p>70.8% C</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】1年生は昨年度行った遠足の事前学習や講演会を行う機会が無かったため、昨年度に比べ大幅に数字が低下した。一方で、2、3年生は主に探究の授業内で能登の調べ学習などを行うことで、ふるさとへの理解が進んだと考えられる。</p> <p>【改善策】今年度より始まった「地域の特色を活かしたふるさと教育推進事業」において、講演会や地元の人々との交流、ディスカッションなどを行い、探究の時間において能登の調べ学習などを行うことで、生徒のふるさとへの興味理解を高めていく。</p>
<p>・異文化を理解しながら、ふるさとに愛着と誇りを持ち、グローバル、ローカルそれぞれの視点で社会に貢献する資質と態度を育成する。</p>	<p>・異文化交流 ・留学希望生徒への支援</p>	<p>【満足度指標】（生徒）</p> <p>異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が高まっている。</p>	<p>4月に比べると、異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が「湧いた」・「やや湧いた」と答える生徒の割合の合計が</p> <p>A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満</p>	<p>【7月実施学校評価アンケート】（生徒）</p> <p>77.5% B</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】2年生の海外研修が再開されることもあり、昨年度同時期に比べ、2年生の数値は大幅に伸びている。一方で、1年生の数値が10ポイント以上下降している。</p> <p>【今後の対応】海外留学に参加する生徒の経験などを1年生に還元する機会を設けるなどして、異文化への興味関心を高めていきたい。</p>
学校関係者評価委員の評価		アフターコロナにおける海外研修の再開を機に、国際的に視野を広げる取組を前面に出して本校の魅力を発信してもらいたい。将来、地元に戻る若者が増えるようふるさとに貢献できる人材育成に努めてもらいたい。			
評価結果を踏まえた今後の改善方策		イギリス海外研修の活用方法を検討し、本校の特色を一層強めていく。石川県の企業を学ぶプログラムを継続し取り組む。			

## 2 進路志望実現のための学力の形成

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<p>・基礎学力の定着を着実に進めるとともに、探究型学習を推進して困難な課題と向き合い考え抜く、粘り強い思考力を育成する。</p> <p>・生徒の可能性を最大限に引き出し、大学入試制度の変化にも対応できる進路指導を実践する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>志を貫くためのキャリア教育</li> <li>キャリア教育講演会</li> <li>全国模試の校内採点による早期弱点指導の徹底</li> <li>学習時間調査</li> <li>ホーム担任、教科担当者、部顧問による個人面談</li> <li>進路情報の発信</li> <li>進路講演会</li> <li>難関大学入試問題解法研究</li> <li>金沢大学入試問題解法研究</li> <li>習熟度別学習指導（週末課題）</li> <li>スーパー難関大学と難関大学別の講座や個別添削指導</li> <li>金沢大学による出張講座</li> <li>保護者への進路説明会</li> <li>学習計画の作成とチェック</li> <li>志望校群別検討会（2年）</li> <li>志望校検討会（3年）</li> <li>出願校検討会（3年）</li> <li>志望理由書の作成（1、2年）</li> <li>批判的思考力育成</li> <li>放課後学習会</li> </ul>	<p>【成果指標】 （生徒学年別） 第1志望に対して明確な理由がある。</p>	<p>高校卒業後について自分の言葉で語ることができると答えた生徒の割合が各学年目標に対して</p> <p>A 100%以上 B 80%以上 C 80%未満</p>	<p>【7月実施学校評価アンケート】</p> <p>&lt;生徒：1年生&gt; 77人 64% C &lt;生徒：2年生&gt; 110人 76% C &lt;生徒：3年生&gt; 152人 95% B</p>	<p>【判断基準】各学年目標 1年120人（6割） 2年140人（7割） 3年160人（8割） Cの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】自らのキャリアについて明確にできる生徒の割合は、学年が下がるごとに低くなっている。キャリア教育講演会等の活動が夏休み以降の取り組みであったこともあるが、社会の高度化・複雑化によるキャリア形成の難しさも背景にあると考えられる。多くの生徒は、志望校や志望学部を持つてはいるが、それをキャリア形成にまで繋げるには至っていないものと思われる。</p> <p>【改善策】キャリア教育講演会や進路講演会などの取り組みを通して、外部人材の知識や経験に触れる機会も取り入れながら、生徒自身が「何になりたいか」「どう在りたいか」を主体的に考え、キャリア形成することができるように支援していく。</p>
		<p>【成果指標】 （1年生生徒） 学習習慣を身につけ、学力を向上させている。</p>	<p>（進研模試7月と1月の3教科総合偏差値の比較） 入学後、学力を伸ばした生徒が</p> <p>A 160人以上 B 130人以上 C 130人未満</p>	<p>【4月スタディーサポートから7月進研模試で3教科総合偏差値を伸ばした生徒】</p> <p>&lt;生徒：1年生&gt; 186人 A</p>	<p>【判断基準】1月の模試結果で判定する。 Cの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】偏差値では伸ばした生徒は186人だが、GTZを伸ばした生徒は78人に留まった。学習オリエンテーションを行い、予習の仕方や授業の受け方、復習の仕方について説明し、実践させているが、学習習慣が定着してない生徒や学習時間が不足している生徒も多い。</p> <p>【今後の対応】授業の予習・復習、小テストなどの当たり前にやるべきことに、目的意識を持って取り組ませる。日々の学習記録（Classi）や考査や模試ごとの振り返りを通して、学習の自己管理の意識を高める。生徒の進路意識を高め、学習に対しての意欲向上を図る。</p>
		<p>【成果指標】 （1年生生徒） 着実に学力を向上させている。 （進研模試1月）</p>	<p>1月進研模試での学力到達度（GTZ）のSランクの生徒が</p> <p>A 35人以上 B 25人以上 C 25人未満</p>	<p>【7月進研模試3教科総合での学力到達度（GTZ）】</p> <p>&lt;生徒：1年生&gt; 23人 C</p>	<p>【判断基準】1月の模試結果で判定する。 Cの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】S層の「知識・技能」の得点率は同じ層の全国平均だが、Sに続く層では全国平均を下回っている教科もある。「思考力・判断力・表現力」は全ての教科でS層でも同じ層の全国平均を下回っている。</p> <p>【今後の対応】基礎基本となる「知識・技能」で取りこぼしている点を自覚させ、徹底した積み上げ学習を促す。解答ありきではなく、解答のプロセスを重視した学習にシフトさせ、難しい問題であってもあきらめずに試行錯誤しながら根気強く取り組むよう働きかけていく。</p>

	<p>【成果指標】 (2年生生徒) 着実に学力を向上させている。 (進研模試7月と1月の3教科総合偏差値の比較)</p>	<p>2年次に、学力を伸ばした生徒が</p> <p>A 160人以上 B 130人以上 C 130人未満</p>	<p>【7月進研模試3教科総合での学力到達度(GTZ)】 &lt;生徒：2年生&gt; 1年1月進研から学力を伸ばした生徒数 75人 C</p>	<p>【判断基準】1月の模試結果で判定する。 Cの場合は改善策を検討する。 【分析】十分な学習時間がとれておらず、2教科程度しか十分な学習時間が確保できていない。 【改善策】学習時間の入力等を通して日々の振り返りをしっかりとさせていく。また、より長いスパンで課題に取り組みさせることで、計画的に学習に取り組む姿勢を育む。</p>
	<p>【成果指標】 (2年生生徒) 着実に学力を向上させている。 (進研模試1月)</p>	<p>1月進研模試3教科総合で学力到達度(GTZ)のSランクの生徒が</p> <p>A 30人以上 B 20人以上 C 20人未満</p>	<p>【7月進研模試3教科総合での学力到達度(GTZ)】 &lt;生徒：2年生&gt; 19人 C</p>	<p>【判断基準】1月の模試結果で判定する。 Cの場合は改善策を検討する。 【分析】1年1月時と比べSランクから下げた生徒が9人、AランクからSランクへ上昇した生徒は8人となっている。主に文系で数学、理系で国語の成績を下げている。 【改善策】Sランクの生徒への上位者指導を本格化する。Aランクの生徒においても、難関大合格者と差がついている科目は何なのかを明確にし、弱点補強に取り組ませる。</p>
	<p>【成果指標】 (3年生生徒) 生徒ひとりひとりが高い志望を持ち、進路実現を果たしている。</p> <p>*スーパー難関大学とは、東大・京大・国公立大医学科を指す。</p>	<p>スーパー難関大学の合格者が</p> <p>A 5人以上 B 3人以上 C 3人未満</p> <p>難関10大学の合格者数が</p> <p>A 25人以上 B 20人以上 C 20人未満</p> <p>金沢大学の合格者数が</p> <p>A 35人以上 B 25人以上 C 25人未満</p> <p>国公立大学の合格者数が</p> <p>A 140人以上 B 120人以上 C 120人未満</p>	<p>【7月進研模試5教科総合での学力到達度(GTZ)】 &lt;生徒：3年生&gt;</p> <p>スーパー難関大学 C 難関10大学 C 金沢大学 A 国公立大学 A</p>	<p>【判定基準】大学入試結果で判定する。 Cの場合は改善策を検討する。 【分析】7月進研模試の結果(GTZ) ・スーパー難関大合格可能性のある生徒(S1:1人)…C ・難関10大合格可能性のある生徒(S2S3:18人)…C ・金沢大合格可能性のある生徒(A1A2:50人)…A ・国公立大合格可能性のある生徒(B2以上147人)…A 中・下位層は底上げできつつあるが、上位者が少なく、全体的に志望校のレベルには達していない。学習時間を十分とれていないことが要因だと考えられる。 【対応策】 ・授業や教科面談を通して個に応じた学習方法や取り組むべき課題を具体的に確認し、着実に学力を伸ばす。 ・GTZのS層とA層の生徒については二次試験で配点が高い教科科目でしっかりと得点ができるよう意識させ、二次試験で必要な科目の学習に取り組ませる。B層やC層の生徒については共通テストでしっかりと得点ができるよう意識させ、基礎基本事項の徹底を目標とした学習に取り組ませる。</p>
学校関係者評価委員の評価	<p>高校生の琴線に触れる20歳代の本校卒業生を招き講話を聞く機会を設けることで、生徒のモチベーションを上げたり、学習方法を教わるために効果的であり、学力形成につながる事が期待される。</p>			
評価結果を踏まえた今後の改善方針	<p>卒業生や生徒同士、年代の枠を越えた縦のつながりを意識できる取組を進めていく。生徒の高い志望実現に向けて今後も粘り強い指導を続けていく。</p>			

### 3 教員の総合的な指導力の育成

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒理解に努め、共感力と生徒支援力の向上を図るとともに、人間としての在り方・生き方を育む指導力を高める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>スマートフォン、携帯電話等によるインターネットトラブル（いじめを含む）に関する校内講習会の実施と、新しいトラブル対策のための資料の作成と配付</li> <li>生徒会によるネットトラブル防止啓発活動の企画・実施</li> </ul>	<p>【成果指標】 (生徒)</p> <p>スマートフォン等によるインターネットトラブルに対する、安全・予防対策を実践している生徒の割合が高まっている。</p>	<p>スマートフォン等によるインターネットトラブルに対する安全・予防対策を、「十分に実践している」・「やや実践している」と答えた生徒の割合の合計が</p> <p>A 100% B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満</p>	<p>【7月実施学校評価アンケート】 &lt;生徒&gt;</p> <p>94.3% B</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 達成度はB状況で、安全のためには、A状況100%を目指していくべきである。</p> <p>【今後の対応】 後期は、執行部による主体的な活動を増やし、デジタル資料や、考える場面を入れた啓発活動に取り組んでいきたい。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>教職の専門性を基礎とし、教科指導力や学級経営力、危機管理能力などの実践的な指導力の向上に努める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「生徒による授業評価」の結果に基づく授業改善の推進</li> <li>学習到達度に応じた予習・復習の取り組み方法の提示</li> <li>Google classroomを活用した復習内容の提示</li> <li>予習チェックの呼びかけ</li> <li>「効果的な予習を促す」指導及び「多様な見方考え方が身につく」指導に関する教科内及び教科間での研究と情報共有</li> <li>批判的思考力育成課題「知のよりみち」の更なる活用を図るために編集を工夫</li> </ul>	<p>【成果指標】 (生徒)</p> <p>国語・数学・英語において「私は授業の準備をして授業に臨んでいる」と答える生徒の割合が高まっている。</p>	<p>国語・数学・英語における「私は授業の準備をして授業に臨んでいる」に関して、「あてはまる」・「ややあてはまる」と答える生徒の割合の合計が</p> <p>A 90%以上 B 85%以上 C 80%以上 D 80%未満</p>	<p>【7月実施第1回生徒による授業評価】</p> <p>87.2% B</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 昨年度の同時期より1.4ポイント低く、「あてはまる」の割合も4.7ポイント低い。今回の授業の準備をしないわけではないが、不十分と感じている生徒が多く、学習時間の確保が必要である。</p> <p>【今後の対応】 2学期以降は、学校行事や部活動も活発になり、授業内容も少しずつ難易度が上がることから、授業の準備（予習・復習）に対する達成度が下がる傾向にある。モチベーションが下がらないよう、細かな声掛け・チェックを粘り強く行っていく。</p>
		<p>【成果指標】 (生徒)</p> <p>「多様な見方考え方が身につく授業」と評価した生徒の割合が高まっている。</p>	<p>「多様な見方考え方が身につく授業」に関して「あてはまる」・「ややあてはまる」と答える生徒の割合の合計が</p> <p>A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満</p>	<p>【7月実施第1回生徒による授業評価】</p> <p>92.2% B</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 昨年度の同時期より2ポイント下降した。教員対象の学校評価アンケートにおいても、思考力を高める課題を毎時間もしくは週ごとに出している教員は63%にとどまっており、授業改善を更に進めていく必要がある。</p> <p>【今後の対応】 研究授業だけでなく、互見授業の取組を更に活発化させ、得られた工夫や発見を教科会議等で共有することで授業改善を推進する。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>校内でのOJTによる若手研修を、中堅・ベテラン教員の経験を活かしながら効果的に進め、教職員全体の指導力向上を図る。</li> </ul>	<p>「石川県教員研修計画」に基づいて、学年・教科を主体としたOJTによる若手教員育成を推進する。</p>	<p>【満足度指標】 (若手教員)</p> <p>OJTをとおして教員としての成長を実感できる。</p>	<p>OJTにより「教員としての成長を実感できた」・「ややできた」と答えた若手教員の割合が、</p> <p>A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満</p>	<p>【7月実施学校評価アンケート】 &lt;教員&gt;</p> <p>18人 78.3% D</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 昨年同時期と比較すると、「実感できた」「ややできた」と答えた若手教員の割合が10ポイント以上上昇しているが、D評価となった。初めての校務分掌を担当する教員を中心に成長が実感できているようであるが、校務分掌内での役割分担によっては、業務内容が定型化し、新鮮味が感じられない場合もあるようである。</p> <p>【改善策】 若手教員がステップアップできたと実感できるような役割分担を、各課主任が割り振るよう工夫していく必要がある。また、その都度業務のねらいや意義を説明しながら、指導していくことも必要である。</p>

<p>・GIGA スクール構想に基づいて1人1台端末を効果的に活用した授業を実践する力を身に付けることにより、生徒の学びの変容を促す。</p>	<p>情報課やICT支援員とも協力し、学校を挙げてGIGAスクール構想を推進する。</p>	<p>【成果指標】 (教員) Chromebookを活用して、生徒の主体的で深い学びを促すよう実践している。</p>	<p>「Chromebookを活用して、生徒の主体的で深い学びを促すよう実践している」に、「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた教員の割合が、 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満</p>	<p>【7月実施学校評価アンケート】 &lt;教員&gt;  29人 65.9% C</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】アンケート項目を一昨年度の「ICTを活用して」から昨年度は機器を絞り「Chromebookを活用して」と変更し、さらに今年度は10%ずつ目標を高く設定した結果、Chromebookの活用は多く見られるようになったものの主体的で深い学びに結びついていると実感するまでには至っておらず、A+Bの割合は昨年並であった。 【今後の対応】引き続き情報課で研修や実践事例の紹介を行っていく。また、校内の互見授業はもとより、教員総合研修センターが実施しているGIGA出前サポート、生徒1人1台端末授業づくり推進事業のPT教員による公開授業を活用することでChromebookを活用した実践に繋げていく。</p>
<p>学校関係者評価委員の評価</p>		<p>若手育成のためにコミュニケーションをとり、人間関係を良好にすることが不可欠である。IT・コンピュータに関わる業務は若手が得意であるので若手に新しい業務を任せることにより、職場全体の業務改善と併せ、若手のモチベーションの向上が期待できる。</p>			
<p>評価結果を踏まえた今後の改善方策</p>		<p>校務分掌等における未経験の業務で滞ることがないように、業務の引き継ぎなどを円滑に進める。</p>			

4 魅力ある学校づくり					
重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<p>・特色ある教育活動（第5期SSH事業、NSH事業）を推進し、その成果を全国的に普及する。さらに、小中学生をはじめ学校の枠を超えた科学技術交流を促進し、理数教育の水準向上を目指す。</p>	<p>学校設定教科「探究」の成果物等の他校への普及</p>	<p>【成果指標】 本校の開発した教材を提供し、県内外の他校（中学校を含む）に成果の普及を図っている。</p>	<p>本校の開発教材や報告書の閲覧件数（ダウンロード数）が、前年度に比べて増加数が</p> <p>A 1000件以上 B 500件以上 C 200件以上 D 200件未満</p>	<p>【成果指標】  年度末に集計・評価を行う</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】 本校ホームページからのダウンロードは着々と増えており、本校のこれまでの成果が、他校に広まっていることの表れと考えられる。</p>
	<p>物理チャレンジ、化学グランプリ、生物学オリンピック、数学オリンピック、全国総合文化祭等の全国規模の各種大会やコンテストへの出場者の育成</p>	<p>【成果指標】（生徒） 全国大会相当への出場の決定数が増えている。</p>	<p>全国大会相当への出場が決定した個人またはグループ数が</p> <p>A 4以上 B 3 C 2 D 1以下</p>	<p>【成果指標】&lt;生徒&gt;  2件 C</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】 高校生バイオサミット決勝進出1件、物理チャレンジ決勝進出1件、全国総文自然科学部門ポスター部門奨励賞 【改善策】 課題研究などに関する全国大会につながる発表や数学オリンピックなどはこれから行われる。良い結果につながるよう指導していく。</p>
	<p>・英語に関するコンテスト（スピーチ、ディベート、エッセイ、暗唱、劇など）、弁論大会、その他課題研究コンテスト等への参加や応募の促進 ・進路達成を見据えた指導体制の構築</p>	<p>【成果指標】（生徒） 左記の大会やコンテストに参加し、実績を上げている。</p>	<p>左記大会やコンテストに参加し</p> <p>A 優勝を含む入賞4件以上 B 入賞 3件 C 入賞 2件 D 入賞 2件未満</p>	<p>【成果指標】&lt;生徒&gt;  1件 D</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】 総文期間の出展のみの判定となるため、絶対数が少なかった。また、1学期はコンテストの準備期間に当たったため、提出できたものがなかった。 【改善策】 観光甲子園、聞き書き甲子園、ビジネスプラングランプリに参加するなど例年よりも探究活動内での作品発表を増やしている。入選できるように指導していく。</p>
	<p>CEFR B1以上の生徒の増加</p>	<p>【成果指標】（生徒） CEFR B1以上の生徒が増加している。</p>	<p>CEFR B1以上の生徒が</p> <p>A 65人以上 B 50人以上 C 40人以上 D 40人未満</p>	<p>【成果指標】&lt;生徒&gt;  年度末に集計・評価を行う</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】 今後行われる、ベネッセのGTECの結果などを参考にして、改善策を考えていく。</p>
<p>学校関係者評価委員の評価</p>		<p>地域は進学実績を求めている。SSHやNSHの海外研修等の取組は素晴らしいことであり、例えばイギリスをテーマに国際性を前面に出した学校の魅力発信も志願者の増加、ひいては学校の活性化につながるのではないかと。</p>			
<p>評価結果を踏まえた今後の改善方策</p>		<p>SSH、NSH事業を探究課中心に今後も推進していく。進学実績を出し続けることが本校の使命であり、生徒一人ひとりの進路実現に向けて、引き続き計画的・組織的に取り組んでいく。</p>			

## 5 働き方改革の推進

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<p>・教職員は、ワークライフバランスやタイムマネジメントを意識しながら不断に業務改善を進め、教育活動の質的向上に努める。</p>	<p>・情報共有の仕方をデジタル化するなど工夫し会議のペーパーレス化を進めるとともに、効率的・効果的な会議運営を行う。</p> <p>・主任を中心に業務内容の可視化を図ることで計画的に業務に取り組む。</p> <p>・若プロなどの校内研修を充実し教員の資質を向上させることで、業務の平準化を図り、分業と協業の体制をつくる。</p> <p>・月2回の定時退校日と8月の閉校日を設ける。</p> <p>・長期休業中にまとまった休暇を取得する。</p> <p>・年休を計画的に取得する。</p> <p>・部活動の休養日を適切にとる。</p>	<p>【成果指標】 （教員） 業務の工夫・改善により効率化を図る。</p>	<p>業務の工夫・改善により効率化を「図ることができた」・「やや図ることができた」と答えた教員の割合が</p> <p>A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満</p>	<p>【7月実施学校評価アンケート】 ＜教員＞</p> <p>30人 65.2% D</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 Google スプレッドシートを活用して、欠席連絡や朝礼での連絡をデジタル化する等、業務改善に取り組んでいる。一方で各課主任やホーム担任はもとより、若手教員を中心に業務の効率化が進んでいない。要因として、アフターコロナの中で、業務が俯瞰的に捉えられていないことと併せ、業務を具体的に進める上で、若手教員の経験が浅いことが挙げられる。</p> <p>【改善策】 アフターコロナの中で、業務を俯瞰的に捉えることができるように、業務フローチャートを作成し業務を可視化することで計画的に取り組む。また、若プロ等の研修により若手教員に対して分掌業務の周知を図るとともに、OJTにより業務遂行のための実践力を高める。</p> <p>情報共有の効率化においては、Google スプレッドシート等の活用が進められており、教職員への浸透が進むにつれ業務の効率化が期待できる。</p>
学校関係者評価委員の評価	若手が多く歪な年齢構成の学校では、OJTで業務を進めるにも限界がある。近隣中学校での業務改善の取組を参考に、さらに働き方改革を推進してはどうか。				
評価結果を踏まえた今後の改善方策	今年度、生徒の欠席等の家庭連絡をデジタル化し、通知表の通信欄を一部廃止した。校外巡視を大幅に削減し改革を進めている。今後も不断の取組として改革を推進していく。				